

お陰様でこうして無事に支援卒業の日を迎えることができ、今は感謝の気持ちでいっぱいです。

今年の今頃、私たち親子は長い不登校生活の果てに進むべき道を見失ってしまいました。それが今では、学校生活が楽しいと言いながら休まず登校するわが子を笑顔で送り出せる毎日が過ごせています。

ペアレンツの先生方に手をさしのべていただけていなかったら、今でも私たちはまだ暗いトンネルの中をさまよっていたことでしょう。

小2から息子の不登校は始まりました。新学期、運動会のリレー選手に選ばれたことをとても喜びはりきっていた息子が朝のリレー練習に行き渋るようになり。登校途中に強風が怖いと言って泣きながら家へ引き返してきたことがあり、それ以来、息子が風を怖がる様子は日増しにエスカレートしていきました。登校にも影響が出るようになり担任と話し合ったり、心療内科へ連れて行き専門医にも相談しました。運動会当日は笑顔で頑張る姿がありましたが、その日を最後に教室へは全く入ることが出来なくなりました。

「これが引きこもりの第一歩だ」父親は息子を力づくでも何とか行かせようとしたが、「僕は今日まで怖いのを我慢してがんばったんだから、もう絶対に行かない!」と泣きながら激しく抵抗する息子。

それでも何とか説得して一緒に登校しようと試みました。

通学路上で何度も固まり、すれ違う大人たちからジロジロ見られ、やっとの思いで校門をくぐったのにまた足が止まり、炎天下の校庭に1時間以上も親子で立ち尽くし。

そんな時に仕事先の父親から「学校には行ったか?」と確認のメール。

「いったいどうしたらいいの? 誰か助けてー!」

私は心の中で叫び続けました。いま思い出しても胸が苦しくなります。

学校のスクールカウンセラーには「母子分離不安ですね。無理させずに様子を見ながら対応しましょう」と言われました。様子を見ながら、といっても一体どうしたらよいのか途方に暮れました。

図書館で不登校関係の本を手あたり次第に読みあさり、ネットでもいろいろ調べ。でも、すっかり青ざめた顔で全く動けなくなっている息子を目の前に、母親の頭と心はますます混乱してゆくばかりでした。

学校へ行かなくてはならないのは百も承知しており、

「みんなと同じように学校に行けない自分はダメな人間だ。

僕なんて生まれてこなければよかった。ママ、ごめんなさい。」

学校へ行けなくて一番苦しんでいるのは息子自身なのだと悟った時、

「頭を冷やして、まずは目の前の息子をもっとしっかり見よう」と

私は思い直しました。

とにかく親子で孤立しないよう、学校や友人との関わりを絶やさぬよう、できる限りのことをしました。

息子は地域のサッカークラブなどの活動は続けられたので、父親がコーチとして一緒に参加したり。母親もPTA役員をやりながら、息子を学校へ連れて行き先生と会わせたり、時には先生の手伝いをさせてみたり。友だちや親を家へ招いて一緒に食事をしたり。

いつでも学校へ戻れるようにと考え、学校や友人とのよい関係を維持していくよう努めました。

息子はサッカークラブのキャプテンを務める活発さもあり、周囲からは「不登校だなんて信じられないね」と言われ、親も同じ気持ちでした。「少し休んで落ち着いてエネルギーが回復したら、いずれ登校に前向きになれるだろう」そう信じて待ちました。

実際に息子も自分なりに努力して、保健室登校から教室復帰を果たしたこともありましたが長くは続きませんでした。

結局、何が問題なのかよく判らず、公的な相談機関に母子で何度も通ったり、民間の支援機関に実際に支援を依頼したり、できる限りのことは全てやりましたが、解決には結びつかず、時間ばかりが虚しく過ぎていきました。

長い人生のほんの数年間といいますが、小学校の成長著しいこの時期の数年は、いえ、一日であっても二度と取り戻すことはできません。

いくら学校外に活動の場があったとしても、子どもの社会の中心にはやはり学校があり、学校生活に身を置くことのできない子どもは、大きな居場所を失って、自分の存在価値を認めることすらできなくなっていく。このどうしようもなく残酷な現実が一番大きな問題です。

息子のいるべき場所はここ（家の中）ではない、とわかっているのに、どうすることもできない、親として無力な我が身を恨みました。

そうして一年前のある日『無理して学校へ行かなくていい、は本当か』水野先生の著書のタイトルが一筋の矢のように私に突き刺さりました。

その頃、不登校関係の本や情報を無意識に遠ざけていたのですが、水野先生の本を読み進めるうち、今までにない希望の光のようなものを強く感じ始めていました。そこには理論や理屈だけではない、実際に問題を抱えた親子たちを多数支援し、立ち直らせてきた実績があるからこそその確かな説得力がありました。

そして、悩める親に寄り添う温かく解りやすい言葉の一つ一つに硬くなっていた心が少しずつ解けていくような気がしました。自分なりに努力してきたつもりでも、家と学校の距離は開いていくばかり。家庭の中に入り、親と子を共に支援していく、水野先生が展開している支援の形こそ私たちが求めてきた、まさにそのものだと思えました。

すぐさまペアレンツキャンプのホームページへ飛んで行き、支援の問い合わせを出しました。

そうして初めての電話カウンセリングでお話しした山下先生の温かく的確な応答に、一度で十分な信頼を感じ、ぜひとも支援をお願いしたいとの思いを一層強くしたのでした。

思い返すと本当にこの時が私たち親子の運命の分かれ目でした。

私たちが長年苦しんできた状況に配慮し、早々に支援をスタートしていただきました。担当は佐藤先生です。

家庭ノートや電話相談を通して、子どもの様子、親子の会話から子どもの性格傾向や親の対応の仕方など細かく見ていただく中で、自分たちでは見過ごしてきた多くの問題点に気づいていきました。

息子はこだわりが強く人の話を素直に受け入れない頑固な面があり、

子どもとぶつかると、つい親もメシテイの対応を頻発していました。また母子の距離が近く、小6男子にしては幼なすぎる対応をしており、父親も含めて知らず知らずのうちに予上位の対応も。これら親のメシテイや予上位の対応の積み重ねが、息子の年相応の自立を妨げ、ひいては学校という社会に適応しづらい性格傾向を形作ってきてしまったことを初めて認識することができました。今までそれらを改めていくことの必要を学ぶ機会はなく、支援のなかで我が家にあった家庭教育、PCMについて基礎から教えていただいたことは、親としての大きな財産になりました。

佐藤先生はいつも辛抱強く耳を傾け、親のどんな些細な疑問にも丁寧に応えてくださいます。また場面に応じてどのような対応がふさわしいか具体的に解りやすく教えてくださり、日常生活の中にすぐ活かしていくことができました。

不登校の子を持つ親が抱えている自責の念、無力感、孤立感はとても大きいものです。

私たちの息子をわが子同様に思い、問題解決に向けて一緒に伴走してくださる先生の存在が大きな心の支えになりました。

過去、登校に何度も挫折した苦い経験から、復学に向けて親もまた緊張と不安でいっぱいになるのですが、水野先生が温かく力強い声で、「しっかりサポートしていきますので、一緒に頑張ってください！」と直接言葉を掛けてくださった時には、胸が震え思わず涙がこぼれました。先生方が早朝から深夜まで私たち家族のために奔走してくださる真剣な姿を間近に見て、「自分たちこそが本気になり、しっかり立ち直らなければ！」との決意を新たにするのでした。

また、支援に関わって下さった先生方の見事なチームワークは、役割の重要性について学ぶ機会でもありました。親もまたそのチームの一員となることで、親は親の役割を再認識します。

復学準備は子どもの仕事なので、親は基本的に見守るだけ。

訪問カウンセリングの先生が息子の不安に一つ一つしっかり寄り添いながら、必要な準備をガッチリとサポートしてくださいます。

息子は先生たちの訪問を毎日心待ちにして厚く信頼を寄せていきました。

今までなら親が全ての責任を背負い、子どもにあれこれ手出し口出し、あげくのはてに親子できりきり舞いになるところ。

「お母さんはニコニコ笑ってドーンと構えていてください」

と言ってもらえ、まるで夢を見ているみたいでした。

そんな復学準備期間を経て、息子は自分で決めた復学予定日に無事学校へ戻っていきました。

久しぶりに少し小さくなったランドセルを背負い「いってきます」と玄関を出る息子の姿をこれからもずっと忘れることはありません。

その後、修学旅行、学芸会、運動会など大きな行事にも積極的に参加し、明るい表情を取り戻していくわが子を見られるのはこの上ない喜びです。

「学校へ行っていると外を堂々と歩けるよね」息子が嬉しそうに語ったことがあります。これまでの息子のいろんな思いが凝縮されているようで、私には忘れることのできない言葉です。

今までの長い不登校生活を思うと、この数か月間の劇的な変化はまるで奇跡を見ているようでした。

「先生たちを信じてお任せしていたら絶対に大丈夫だから！」
ペアレンツ親の会で、卒業したお母さんたちから掛けてもらった言葉どおりになりました。

登校刺激の教育コーチングの先生が帰られた後、泣きながら

「僕は絶対に学校へ行く！学校へ行って見返してやる！」
こんなに強く自分の意志を言葉にする息子の姿を見るのは初めてでした。
今まで親にはどうやっても入れることのできなかつた息子のスイッチ。
眠っていた意志の力に火を灯してもらい、「意志が変われば行動が変わる」ということを目の前に実証してみせていただきました。

雷をこの世で一番恐れていた息子は、コーチング以来、
佐藤先生を雷以上に恐れるようになったのですが、
「あの時、来てもらえてなかったら今の自分は無い。
だからすごく感謝している」と言えるまでになりました。

先日、息子が小学校の卒業文集に載せるという作文を見せてくれました。
自分が不登校という他の子とは違う経験をしたこと。後悔もあるが、
この経験をプラスに考えて、これからの人生を楽しめるように
いろんなことに挑戦し、努力していきたい。
そこには息子の決意と将来の夢が堂々と綴られていました。
こんな作文を読める日がくるなんて想像もできませんでした。

これまで全身全霊で支えてくださったペアレンツの先生方への感謝は
言葉に尽くせません。

家庭内で子どもの自立心や社会性を育てていくことの大切さ。
親の対応次第、親が変われば子も変わる、ということ
身をもって学ばせていただきました。

まだできてないことばかりですし、子どもの成長とともにまた向き合う
課題もたくさんあります。これからも学びを続け、わが家にあった
家庭教育の形をさらに深めていくことを通して、これまで支援いただいた
ご恩への感謝を表していきたいと思っています。

水野先生の家庭教育とPCMが世の中にもっと広がり、親たちがしっかり
学ぶ機会をもつことで、増え続ける不登校などの問題を減らしていくことが
できる、と確信しております。

ペアレンツの理念と支援が一人でも多くの親子に届きますよう、
今後の先生方のご活躍とご発展を心より祈念いたしております。

本当に本当にありがとうございます。

平成29年1月吉日